

一 日本の戦国武将は漢詩を嗜んだ

◇漢詩の知識で命拾い

日本の戦国時代、美濃の斎藤氏の武将 稲葉一鉄は斎藤氏の滅亡後、織田信長に仕えたが、信長はその忠誠を疑い、茶席に誘って殺そうとたくらんだ。茶席に入った一鉄は、相伴の三人(信長の臣下で、一鉄の殺害を命ぜられていた)に乞われ、床の間の掛け軸の絵の賛を読んだ。それには

雲横秦嶺家何在

(雲は秦嶺に横たわりて家何くにか在る)

雪擁藍関馬不前

(雪は藍関を擁して馬前まず)

とあった。すらすらと読んだ一鉄は、問われるままに、その詩について前後の意味を説明して注釈を加えてやった。

これをふすま越しに聞いていた信長は、そこへ走り出て、「その方、一介の武辺者とのみ思っていたが、文の道にも秀でていることが分かった。実はきょう、おぬしを殺そうと思って招いたのだが、わしの気が変わった。殺すには惜しい文武兼備の武将、わしも疑うのをやめるから、お前も心から仕えてくれ」と言い、改めて一鉄の手をとったのであった。(常山紀談 一鉄文学によりて死を免れし事)

「漢詩故事物語 寺尾善雄 河出書房新社」

漢詩の知識が命を救った例である。この句のものと詩は 唐の韓愈の次の詩である。右の掛け軸の句はこの詩の五句と六句である。

「左遷至藍関示姪孫湘」

(左遷せられて藍関に至り姪孫の湘に示す) 韓愈

一封朝奏九重天

一封 朝に奏す 九重の天

一封 一通の上奏文

夕貶潮州路八千

夕べに潮州に貶せらる 路八千

貶 流される

欲爲聖明除弊事

聖明の為に 弊事を除かんと欲す

聖明 天子

肯將衰朽惜殘年

肯えて衰朽を將つて 殘年を惜しまんや

雲橫秦嶺家何在

雲は秦嶺に横たわりて 家何くにか在る

秦嶺 山脈の名

雪擁藍関馬不前

雪は藍関を擁して 馬前まず

藍関 関所の名

知汝遠来応有意

知る汝の遠く来たる 応に意有るべし

汝 姪孫の湘のこと

好収吾骨瘴江辺

好し 吾が骨を収めよ 瘴江の辺に

瘴江 毒気の立ち込める江

八一九年正月十四日、韓愈は仏舎利を宮中に迎え入れようとした唐の十一代皇帝憲宗に、「仏骨を論ずるの表」を奉って、阻止しようとして憲宗の怒りにふれ、刑部侍郎(法務次官)から潮州(広東省)の刺史(州の長官)に左遷された。その時に、はるばる見送りに来てくれた身内の湘にたいして作った詩である。時に五十二歳。

儒者でもあった韓愈は日頃より仏教・道教が嫌いで、特に免税の特権を持つ仏寺が盛んになるのを苦々しく思っていた。「仏骨を論ずる表」の文章の中で、仏教を信仰する天子の寿命は決まって短い、と極論している。天子が激怒するのは当然である。直ちに死に処せられるところを、宰相の裴度らのとりなしで死を免れた。

正月十四日は太陽暦の二月十二日、山深い藍田関はなお雪に覆われていた。路八千というが、長安から潮州まで約三千八百キロである。生きては再び都の土は踏めぬと覚悟しての赴任だった。

しかし翌年には都に呼び戻されて国子祭酒（国立大学学長）に任じられた。詩の題に示された姪孫の湘は次兄の孫である。（彼はのちに二十九歳で科擧の試験に合格している）

稲葉一鉄は戦国の織豊時代的美濃国の武将。幼い時から長良崇福寺に預けられていたが一五二五年の石津郡牧田合戦で父と五人の兄が討死したため、還俗して家を継ぎ、はじめ土岐氏に、次いで斎藤氏に仕え、安藤・氏家とともに、美濃三人衆と呼ばれた。

一五六七年（永禄一〇）織田信長の美濃攻略の際には信長に内応して従い、信長の死後は羽柴秀吉に従った。天正一六年美濃郡上八幡四万石となり、関ヶ原の戦では、当初西軍、合戦直前に東軍に加わった。小早川秀秋の東軍への寝返りに関与した。

二代稲葉正勝は母が春日局として徳川家光の乳母となったため重用され、老中・相模小田原藩主となった。五代正知のとき、山城淀城主となり明治維新を迎えた。維新後、子爵となった。

日本の文人、戦国武将は、中国の漢詩から多くの影響を受けてきた。

頼山陽の「題不識庵擊機山図」は有名で詩吟にはよく詠われている。

鞭声 肅肅夜過河

鞭声 肅々 夜河を過る

鞭 馬のむち

暁見 千兵擁大牙

暁 に見る 千兵 大牙を擁するを

大牙 大将旗

遺恨 十年磨一劍

遺恨 なり 十年 一劍を磨き

流星 光底逸長蛇

流星 光底 長蛇を逸す

流星光底 打ち下ろす劍光の下

不識庵は上杉謙信、機山は武田信玄のことである。

四句目の長蛇は武田信玄のことで、ここは虎でも熊でも龍でもよいのだが、頼山陽は二百五十前の信玄が巳年生まれ（一五四二年）なので蛇を使って文字を選んでいる。

三句目はつぎの詩を引用している。それは中唐の賈島の「詠劍客」である。

「十年磨一劍 霜刃未曾試 今日把似君 誰有不平事」（よからぬたくらみの者を教えろ）

不識庵と機山の作った詩を紹介しましょう。

「九月十三夜陣中作」（九月十三夜陣中の作） 上杉謙信

霜滿軍營秋氣清

霜は軍營に満ちて 秋氣清し

數行過雁月三更

數行の過雁 月三更

三更 夜十二時

越山併得能州景

越山 併せ得たり 能州の景

能州 加賀の能登地方

遮莫家鄉憶遠征

さもあらばあれ 家郷 遠征を憶うを

越山 越後越中の山々

「偶作」

（偶作）

武田信玄

塵殺江南十萬兵

塵殺す江南 十万の兵

腰間一劍血猶腥

腰間の一劍 血 猶腥し

豎僧不識山川主

豎僧は識らず 山川の主

豎僧 愚かなる山僧

向我慇懃問姓名

我に向かつて 慇懃 姓名を問う

この詩は明の太祖（朱元璋）の次の詩を信玄（一五七三没）がまねたものと思われる。

「塵殺江南百萬兵

腰間寶劍血猶腥

山僧不知英雄漢

只恁嘵嘵問姓名」

また次の詩は信玄が美濃（岐阜）の僧にとどけた詩である。

「寄濃州僧」

（濃州の僧に寄す）

武田信玄

気似岐陽九月寒 気は岐陽 九月の寒きに似たり

岐陽 岐阜

三冬六出灑朱欄

三冬 六出 朱欄に灑ぐ

三冬 冬三カ月 六出 雪

多情尚遇風流客

多情 尚お風流の客に遇い

多情な私 風流な貴僧

共対士峰吟雪看

共に士峰に対し 雪に吟じ看ん

士峰 富士山

これなどは、なかなかもので、人によつては五山の詩集に入れても区別がつかないと褒めるほどである。武田信玄は若いころ、快川和尚はじめ名僧に薫陶を受けたという。

戦国武将中、もっとも漢詩の作り手はいえ、直江兼続に指を屈する。この人は上杉謙信後嗣(甥)景勝(会津若松城主)の重臣である。

「日本人の漢詩 石川忠久 大修館書店」

兼続は戦国の世の武士にして単に合戦巧者であつたばかりでなく、漢文、詩歌の素養も相当なものであり、文武両道にたけた人であつた。また、文人や当代随一の学者や僧侶と交流する一方、文化面で私費を投じて奇観本の収集、「文選」の復刻、「古文真宝後集抄」(紀元前五世紀から十二世紀までの中国の詩文の名作を集めた古宝後集の注釈書)の筆写をさせた、などの業績を残している。この武将の兜の前立てに愛の一字を冠していたことから、世間では愛情に厚い武将ではないかと言われているが、これは愛染明王の一字とみるべきだそうである。かれの作を一首。

「織女惜別」

(織女別れを惜しむ) 直江兼続

二星何恨隔河逢

二星 何ぞ恨まん 河を隔てて逢うを

二星 二ひこ星と織女星

今夜相逢散鬱胸

今夜 相逢いて 鬱胸を散ず

情語未終先洒淚

情語 未だ終わらず 先ず涙を洒ぐ

合歡枕下五更鐘

合歡の枕下 五更の鐘

五更 午前四時

◇西郷隆盛の死ぬ直前の詩

翁が西南戦争で戦利あらず故郷の鹿児島に退却したとき、城山に戻り、私学校の目の前の岩崎谷の洞中であつて自決前に作ったものがある。明治十年、五十一歳。英雄、死に至つて、囲碁を打つて漢詩を作る境地とは見事というほかない。

「題岩崎谷洞」

(岩崎谷洞に題す) 西郷隆盛 現在では杉聴雨の作とされている

百戦無功半歳間

百戦 功無く 半歳の間

首邱幸得返家山

首邱 幸いに家山に返るを得たり

首邱 故郷を思うこと

笑儂向死如仙客

笑う 儂死に 向として仙客の如く

仙客 仙人

尽日洞中棋響閑

尽日 洞中 棋響閑なり

棋 囲碁

三 日本のの文人は漢詩を読んでいた

嵯峨天皇に次のような逸話がある。

天皇は新しく渡来した白居易の詩集をひそかに自分だけで楽しんでた。ある日、「閣を閉じて只だ聴く 朝暮の鐘、楼に上がりて空しく望む 往来の船」という句の「空しく」を「遙かに」と変えて、自作であるかのように小野篁に示したところ、遙かが空しくであればさらにすばらしいと評したので、天皇は卿の詩情は白居易と同じだと感服したという。

◇芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」は漢詩から着想を得た句といわれている。

「唐詩 村上哲見 講談社学術文庫」

南宋の魏慶之^{ぎけいし}が撰した詩話集「詩人玉屑」^{ぎよくせつ}に王籍^{おうせき}の詩が収録されていて、芭蕉はこれを読んだのであろう。

「唐詩新選 陳舜臣 新潮文庫」

蟬の鳴き声が静かというのは、梁の王籍^{おうせき}（六世紀前半）の五言律詩「入若耶溪」^{じやくやけい}に出てくる。

蟬噪林逾静 蟬噪いで林 逾よ静かに

鳥鳴山更幽 鳥鳴いて山 更に幽なり

この二句は聴覚から若耶溪を描写している。音があることによって却って静寂が強調されるという感覚は納得のいく逆説的真理でしょう。

王安石の集句詩（別な詩人の句を組み合わせて仕立て上げた詩、王安石が始めたといわれる）にこの王籍の一句と謝貞の一句を組み合わせて次の対句を誕生させている。

風定花猶落 風定まりて花 猶を落ち

鳥鳴山更幽 鳥鳴いて山 更に幽なり

この句の「風定まりて花猶落つ」は六朝時代の謝貞が八歳のときに作った「春日閑居」という五言詩の一句ですが、謝貞の詩は戦乱で失われて、今では一首も伝わってない。ただこの一句のみが、特に絶賛されて歴史書「陳書」に記され後世に伝わったのである。

この王安石（十一世紀）の対句は成功した代表的な集句として高く評価された。

王籍の対句は二句とも同じ発想の繰り返しだが、王安石の対句では風の句が「静中の動」、鳥の句が「動中の静」が表現されているから、詩としてはこちらに軍配が上がるということである。

中唐の張籍の「夏日閑居」と題する二つの詩の第一首に、蟬の声は静かである。

無事門多閉 事無く 門 多く閉す

偏知夏日長 偏に知る 夏日の長きを

早蟬声寂寞 早蟬 声は寂寞

新竹気清涼 新竹 気は清涼

閑対臨書案 閑かに対す 臨書の案

◇また芭蕉は「おくのほそ道」の中で奥州平泉において、かつての英雄の戦乱の跡をしのび、

「夏草や 兵どもの夢の跡」と詠んでいる。その下敷きになったのが、杜甫の「春望」の第一句、

「国破れて山河在り」である。ただ杜甫は戦いが続いて国がめちゃくちゃになったという意味で破という字を使っているのであって、戦争の敗戦の勝ち負けとは違う。

李白の文章に題名を「春夜従弟を桃花の園に宴するの序」とする序文がある。この作品は北宋期に編まれた詞華集「文苑英華」「唐文粹」、元代の「古文真宝」にも採られている。この古文真宝は室町時代に日本に伝わり広く読まれた。その李白の文は以下のとおり。

「それ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の若し、飲をなすこと幾何ぞ。古人燭を乗りて夜遊ぶは、良に以有るなり」

この訳は、天地は万物が仮に身を寄せる宿（逆旅）であり、時間（光陰）は永遠に歩み続ける旅人である。そしてはかなく浮かぶ人の生はさながら夢のごとく、歓楽を尽くす時がどれほどあろうか。古人が灯火を手にして夜も遊ぶと詠っているのは、まことにもっともなことだ」

芭蕉の「おくのほそ道」の書き出し「月日は百代の過客にして行く年も又旅人なり」はこの李白から想を得ている。

元禄の作家井原西鶴も「日本永代蔵」の冒頭でこう言っている。「されば天地は万物の逆旅、

光陰は百代の過客、浮世は夢まぼろしといふ」。

「中国名文選 興膳宏 岩波新書」「李白詩選 松浦友久 岩波文庫」
十四世紀の平安中期に藤原公任が編集した、「和漢朗詠集」は漢詩文を学ぶ人の必読書であった。和とは和歌、漢とは漢詩文をさしている。ここに収められた唐人の詩句一九五首のうち、中唐の白楽天が一三五首、元稹が十一首、劉禹錫が四首あるのに、盛唐の李白・杜甫は一首もみえない。李白・杜甫の傑作が当時の日本で全く無視されていたのは、きわめて特異である。

「世界の歴史6 隋唐帝国と古代朝鮮 砺波護ほか 中公文庫」
清朝の康熙帝勅撰の「全唐詩」には日本人の二人だけの名が見えている。それは阿倍仲麻呂と長屋王である。

◇夏目漱石と漢詩

漱石は晩年、小説「明暗」の執筆のかたわら、毎日漢詩を作ることを日課としていた。
大正五年（一九一六）十一月二十日の夜に作ったのが最後の漢詩「無題」（七言律詩）であった。最後の四句は次の如くである。

依稀暮色月離草	依稀たる暮色 月は草を離れ	依稀〓おぼろなる
錯落秋声風在林	錯落たる秋声 風は林に在り	錯落〓入り乱れる
眼耳双忘身亦失	眼耳双つながら忘れ 身も亦た失す	
空中独唱白雲吟	空中に独り唱う 白雲の吟	

というものであった。最後の二句は禅僧の悟りを連想させるが、自分の死を暗示する句とも読める。これを作った翌日から床に就き、十九日後の十二月九日、漱石は胃潰瘍による大内出血をおこして死亡した。享年四十九。漢詩の語句が偶然、後日起こった事柄の予言となることを「詩讖」という。

「怪の漢文力 加藤徹 中公文庫」

正岡子規は夏目漱石と漢詩の交流をしていたが、途中から漢詩界は老臭閑適に浸っているとして漢詩作りをやめた。しかしその後も杜甫の七言律詩「秋興」と題する八首を一首ごとその意をとって短歌にしている。その第四首は「秋深き都はありし様ならで 見知らぬ人の車やるらん」として

「唐詩新選 陳舜臣 新潮文庫」

◇石川啄木と漢詩

杜甫の「九日藍田崔氏莊」の最後の一句、醉把須臾仔細看は短歌「働けど働けど猶我が生活楽にならざり、じつと手を見る」に影響を与えている。

また啄木の詩、一握の砂「我を愛する歌」は次の通り。

東海の小島の磯の白砂に	われなきぬれて 蟹とたはむる
頬につたふ なみだのごはす	一握の砂を示した人を忘れず
大海に向かい一人 七八日	泣きなんとすと家を出でにき
いたく錆びしピストル出でぬ	砂山の 砂を指もて掘りてありしに

以下略

石川啄木は、座右の書として唐詩選に親しんでいた。明治四十一年九月二十九日（啄木二十二歳）の日記には、「杜甫を少し読む。字々皆躍っているようで、言々皆深い味がある。無論樂天などと同じに論ずべきものではない。白（居易）は第三流だ・・」 「日本人の漢詩 石川忠久 大修館書店」つまり啄木は漢詩の知識があり、杜牧の「赤壁」の詩の砂の中から出てきた折戟（折れたほこ）をピストルに変えて、一握の砂の詩にしたと言われている。

昭和三十三年の石原裕次郎のヒット曲にも出てくる。

「錆びたナイフ」一番 作詞萩原四朗 作曲上原賢六

砂山の砂を指で掘ってたら

真つ赤にさびた ジャックナイフが出てきたよ

どこのどいつが埋めたのか 胸にじんとくる小島の磯だ

作詞の萩原四朗はテイクレコードの取締役。この人が漢詩を読んでいたかは不明だが、啄木の詩のピストルをジャックナイフに変えたか、唐の時代の「赤壁」の詩を知っていたのか興味のあるところである。

「盛岡市の啄木記念館に記されていた話」

これのものと漢詩は次の通りである。

「赤壁」 (赤壁) 杜牧

折戟沈沙鐵未銷 折戟沙に沈んで鉄未だ銷せず 折戟 折れたほこ

自將磨洗認前朝 自から磨洗を將つて前朝を認む 前朝 唐の前の六朝時代

東風不興周郎便 東風 周郎が与に便ならずんば 周郎 呉の將軍 銅雀 曹操の別荘

銅雀春深鎖二喬 銅雀 春深うして二喬を鎖さん 二喬 喬公の二人の娘

二〇八年の赤壁の戦いから杜牧の時代まで六百年の歳月がたって、折れたほこがまだ錆びて消滅していないという。更に、呉の將軍周瑜が魏の曹操の大軍の船団を焼き打ちにできた東の風が吹かなかったならば、魏が勝利して絶世の美人である喬の姉妹（呉の大尉（国防相）橋玄の娘で姉は孫策、妹を周瑜が妻にしていた）は魏の曹操に手籠めにされていただろう。という意味である。

◇乃木將軍の詩にもこれに影響を受けたと思われるものがある。

「西南役後過田原」 (西南の役後 田原を過ぐ) 乃木希典

田原一望秋將老 田原 一望 秋將に老いんとす

新戰場荒草木摧 新戰場 荒れて草木摧く

忽見村童三兩四 忽ち見る 村童 三兩四

砂中拾得彈丸來 砂中 彈丸を拾得して来る

三 科挙の試験

昔の中国は役人天国であり、官吏になることが最も有利な職業であった。官吏への門は貴族の子弟に独占されており、情実が横行し不公正がはびこっていた。貴族以外の庶民はたとえ有能な人物でも官界で活躍する余地はほとんどなかった。

隋の文帝はこれを改革しようと広く天下から人材を登用して、貴族の専横を抑え、天子の独裁権を高めようとして科挙の制度を確立した。官吏を試験で採用するのは中国人の発明であった。

(これは中国の四大発明の印刷、羅針盤、火薬や紙にならぶ発明といわれる)

科挙制度によって、試験に合格すれば布衣（一般人）から大臣宰相になれるというこの制度が、天下の青年たちに青春のすべてをこれに投入させることになった。これに合格することは立身出世の必要条件となった。

唐代では「白衣公卿」とか「一品白衫」ともてはやされた。白衣・白衫は無位無官の人の服。将来は公卿（大臣）となって、一品の位になるという意。（官吏の位階級は下から九品、九段階に分けその最高位が一品である）

◇科挙の難関は言語に絶した。一生かかっても及第しないものが多かった。

「夜行」 (夜に行く)

晁冲之

老去功名意轉疎 老い去りて 功名の意 転た疎かなり
 独騎瘦馬適長途 独り瘦せ馬に騎り 長き途を適く
 孤村到曉猶燈火 孤村 曉に到るも 猶お灯火
 知有人家夜讀書 知る 人家 夜書を読む有るを

作者自身たびたび試験に失敗し、及第できなかった人で、老境を迎えて不遇をかちつつ、かつての若き自分の姿を見る思いで、田舎の受験生へ慈しみの眼を向けて通ったに違いない。

◇科挙制度が最も完備した清代末期を見ると、試験は次のような段階があった。

まず地方では、県試、府試、院試があり院試の合格者には生員の称号が与えられ、さらに郷試の予備試験である科試の合格者には秀才の称号が与えられた。
 そして全国で八ブロックの各省ごとに郷試が行われる。

中央の試験は会試と称され、受験生を挙子という。合格者は貢士と呼ばれる。

最終で天子が自ら行なう殿試の及第者が進士である。

1 科試 合格者は秀才と呼ばれ、郷試に赴くことができる。（後漢以降、光武帝の諱が秀であったため秀才という言葉がつかえなくなり、茂才と言いかえられた）

2 郷試 合格者は挙人と呼ばれた。各省の首府で、三年毎に八月に一週間実施。
 成績一番は解元という。（唐宋では解試といった）

3 挙人覆試（覆試は再試験のこと）郷試の翌年二月十五日到北京で。県から旅費が出た。

4 会試 合格者は貢士と呼ばれた。北京で三月九、十二、十五日の三回にわたり実施した。
 （唐末では省試といった）会試の成績一番は会元という。

5 会試覆試 合格者は進士と呼ばれた。宋代から始まった天子が行う試験。この試験によって
 殿試 宋代からは、官僚は皇帝の弟子であるという絆が生まれた。

成績一番は状元という。殿試では落第は無く、順位だけを決めた。

◇高級官僚の登竜門とされた進士科は最難関であり、合格率は唐代で百人に一、二人だった。唐代の後期、毎年約一千名が受験し、合格者は数十人だったが、宋代になると応募者が急増した。

合格者は数百人となり進士となっても官位に就けないため宋代から試験は三年に一度となった。清朝では合格者が二百人ほどいたがこれは初めからの受験生の三千人に一人の割合といわれた。試験の責任者は礼部尚書（文部大臣）でありこの役目を知貢挙と呼ぶ。答案審査員は考官とよび、二十二名が天子から任命され彼らも外部との交通を一切遮断され、試験終了まで缶詰にされる。考官は答案を審査して総合順位を決め、礼部尚書から天子に奏上して裁可を請う。これが四月十五日以内までに行われる。

合格発表を「放榜」といい、張り出される掲示「榜書」はめでたい黄紙を用い濃い墨でふとぶとと合格者の名が書かれた。

科挙最高段階の会試は、宋代からは三年に一度だが、ときに臨時のもの（制挙）もあり清代、二百六十数年のあいだに、百十二回行われた。

首席合格者を状元というが（二位は榜眼、三位探花という）、百十二人うまれた状元のうち、江蘇省四十九名、浙江省二十名で、この両省出身が過半数を占めている。この地方は蘇州であり、ここは江南の中心で貿易など経済の繁栄によって学者や詩文の徒、仏教寺院が多く学問のレベルがずばぬけて高かったのである。

鄧小平、陳毅、郭沫若など二十世紀の偉材を輩出した四川省も、清代二百六十余年間、たった一人の狀元を出しただけである。広東三名、湖北三名、湖南二名、河南、陝西は各一名、雲南、山西、甘肅、台湾からは一人も出ていない。

江蘇省の趙翼（のちの史学者）は三十四歳で進士及第、殿試第一席であったが、乾隆帝がまだ陝西省から第一席が出ていないと言い第三席の王杰と入れ替えたということがあった。

（この二行「大清帝国 増井経夫 講談社学術文庫」）

◇唐代には、毎年科挙の試験が行われていた。まだ殿試というものが無かったため、後世の会試に当たる貢挙を通過すれば進士になった。初唐の科挙には、秀才・明経・進士・明法など六科があった。このうち秀才科は早くに廃止された。明経科は経書（儒学）に通じていることが要求され、進士科は政治の論策・詩賦が試され、明法科は法律の知識が必要であった。明字科は書道に明るく字が上手なこと、明算科は計算能力が試される。これらの諸科のうち応募者が断然多かったのが明経科と進士科だった。しだいに定型的な回答を要求する明経科よりも、自由な力が発揮できる進士科のほうが好まれて盛んになった。

進士科は競争率百倍（唐では合格者は毎年五、三十名）、明経科は十倍といわれ、少し易しかったため「五十歳では若い進士」「三十歳では年寄りの明経」と言われていた。元稹は十五歳で明経科に合格している。

のちに、宋になって、王安石の改革のときに、諸科が廃止され進士科だけになった。進士科には初唐の六八一年以降、詩賦が課せられたことが、漢詩を隆盛に導いた原因の一つといえる。官僚・政治家は同時に詩人であるという現象を生み出すことになった。文学のわかる政治家という伝統が唐代に根付いた。

科挙の試験は採点・出題など方式が定まっているので、非常特別の才能を持ったものがふり落とされるかもしれない。またそのような才能のあるものは科挙を軽蔑して受験しないとも限らない。また宋以降の三年に一度の科挙の試験で救えないような物を別の不定期の試験で採用しようと試みられた。それが制科（制挙ともいう）であった。

制科は科挙が始められた隋の時代から存在し、博学宏詞科、書判拔萃科、賢良方正科などがそれである。制科はある意味では科挙より難しく、皇帝のお声がかりの制旨で行われる。その合格者は北宋の全部を通じても数えるほど少なかった。（この三行「宋名臣言行録 朱熹ちくま学芸文庫」）

◇ところで、荊州は現在の湖北から湖南にかけての土地で、教育熱心で、文化人も多かった。

それなのにどうしても、進士合格者が出なかった。試験の結果が発表されるたびに、出るのは人々のため息ばかりであった。人々は悲観して、自分たちの土地を「天荒」と称していた。

これは天地混沌とした未開の意味であり、同時に人材の不作を自嘲した命名なのである。

百年も二百年も荊州から進士が出ない。ところが長沙の町の劉蛻という者が、はじめて合格した。土地の人たちは夢ではあるまいかと叫びついに「天荒」を破ったのだといった。「破天荒」という言葉は、この劉蛻の進士合格に由来する試験地獄から生まれた成語なのである。

「弥縫録 陳舜臣 中公文庫」

狀元は首席合格者のことであるが、狀は試験答案のことです。一番上に置かれるので、「狀の元」になるのである。首席の答案は、他の人の答案を上から圧えているので「圧巻」という言葉がある。巻は答案用紙のことである。狀元は周りからは未来の宰相候補とみなされた。

◇試験の実情はどのようなものであろう。清の時代の郷試の状況を見てみよう。

地方で行われる郷試は三年に一度、一週間行われる。八月九日に第一回の試験、十二日に第二回、十五日に第三回である。

場所は各省の首府で、中央から試験官が出向いてくる。試験場は貢院はいといい、一人だけ入れる独房が何千、何万と作られ常設の建物である。

南京の貢院は南宋のときに設立され、敷地七万平方米（東京ドーム五個分）、受験生の部屋は二万六百四十四室。（清末に取り壊され市場になった）

部屋は中一メートルくらいに仕切られた独房である。床はなく土間で、三方は煉瓦壁である。長い板が三枚あって、これを壁に横わたしにして、上は荷物の置き棚、次は机、下は腰掛とする。入口に戸は無い。

受験生（挙士）は硯や墨・筆、土鍋・食料品、布団、カーテンを担いで持ち込む。

水がめとトイレは通路の突き当りに設置される。蠟燭は支給される。

本や書類は持ち込み禁止、何百人もの係員が受験生二十人ごとに担当して身体検査を三回行う。係員も外界から遮断されている。係員の兵卒は持ち込み品、カンニング用の豆本などを見つけると、銀三両の賞がもらえるので懸命である。

翌日朝から試験となり、朝暗いうちから係員が回ってきて、前に預けた預かり証と引き換えに答案用紙を配布する。持ち時間は翌日の夕方までである。夜はローソクを灯すこともできるし、土鍋で飯を炊くこともできる。布団で一休みすることもできる。三日目の朝、号砲が鳴り答案を提出（夕方まで出さないで粘ってもよい）すれば外出できる。

次の日第二回の試験が始まり二晩三日で終わる。答案を提出すればこの日は外に出て一日休み。第三回は古今の政治に対する評論を述べる試験。これが終わると一週間にわたった試験が終る。答案は試験官に渡される前に、書記の手ですべて覆写ふくしやされた。筆跡によってその人のものだと知れないようにして審査するためである。（唐代ではまだこれは行われていなかった）

合格すると挙人となり、大きな名誉を与えられる。しかしこの郷試に合格しても、最終の進士になるまでには、挙人覆試、会試、会試覆試、とふるいにかけられ、殿試、朝考に合格しなければならぬ。

試験問題は郷試の場合、四書題が三、詩題が一で韻を指定される。五言排律が標準であった。会試は第一回到四書題三、詩題一。第二回到五経題五。第三回到策論題五が出される。